1967年と1988年における中学生の「食べ物」に 対する意識とその格差

城川 美佳* 高柳満喜子* 西川 浩昭* 田沼 博*
熊倉 伸宏* 豊川 裕之* 高峰 綾子** 門司 和彦**

Food Images Among Japanese Junior High School Students —With a Comparison between Images Found in 1967 and 1988—

Mika KIGAWA*, Makiko TAKAYANAGI*, Hiroaki NISHIKAWA*,
Hiroshi TANUMA*, Nobuhiro KUMAKURA*, Hiroyuki TOYOKAWA*,
Ayako TAKAMINE** and Kazuhiko MOJI**

As there have been rapid changes, not only in diet and food, but also in social infrastructure in the last 20 years in Japan, it should be expected that Japanese attitudes towards food items have also changed. In order to effectively improve both education and health programs, it is essential to make clear what opinions have/have not changed.

For this reason, the authors carried out a nationwide survey on the images towards breads, salad, tempura, grilled fish and other food times of about 21,200 students of 64 junior high schools in 1988 and 1989. The questionnaire consisted of pair comparisons, i.e. modern vs. old-fashioned, cheap vs. expensive, daily vs. occasional, like vs. dislike, commercially-produced vs. made at home, easy to cook vs. hard to cook and domestic vs. exotic. A rating scale with 7 stages was used.

One of the authors, H. Toyokawa, Previously administered the same survey to students of five junior high schools in 1967. As two of these junior high schools are included in the current survey, the authors attempted to clarify substantial changes in images and attitudes towards food items.

The two above-mentioned public junior high schools had total student populations of 672 boys and 631 girls in 1967, and 430 boys and 432 girls in 1988.

The results were as follow:

1) In both schools, students' images of 4 food items—bread, salad, tempura, and grilled fish— changed during the two decades.

2) The differences which had been found between the schools in attitudes towards these 4 food items in 1967 had greatly diminished by 1988. This diminishing was the most

* 東邦大学医学部公衆衛生学教室

** 長崎大学医学部公衆衛生学教室

* *Department of Public Health, School of Medicine, Toho Univ.*

** *Department of Public Health, School of Medicine, Nagasaki Univ.*

significant in attitudes towards grilled fish. Changes in the socioeconomic characteristics of each school's area was seen to be an associated factor.

3) Nevertheless, the two matched-pair categories "daily vs. eventual" and "like vs. dislike" showed little change for every food item during the twenty years.

4) It is suspected that food images among junior high school students are affected not only by the dietary situation in their homes but by both mass-communication and practical experiences as well, including school lunches, and the distribution system, etc.

I はじめに

近年、食生活に大きな変化が起きている。

「食」に対する関心には大略して、「グルメ食志向」に代表されるようなレジャーないしは遊び絡みのものがあるが、疾病予防や健康維持・増進に対する関心も著しく高まっている。たとえば、健康食品志向はグルメ志向よりも広く浸透していると見てよいだろう。このような社会的風潮の中にあって食品や料理などへの関心はますます高まっており、栄養指導、食事管理の社会的ニーズが強まった。これを受けて、栄養指導や食事管理のあり方・進め方もその社会的ニーズを十分に把握した上で適切なものにしなければならない。

これを受けてここでは「食生活の変化」を食品や料理に対する意識ないし印象の変化の面から検討することを意図している。なお本研究では変化のみならず、食品と料理に対する意識ないし印象の地域間格差についても併せて検討するものである。

II 対象と方法

1. 調査対象

対象としては中学生を選んだ。それはその年頃が食習慣・食生活が形成される時期にあり、また周囲の「食」に対する意識を柔軟かつ敏感に捉えてそれに対応し、さらにこの種の調査に対応し易いので、調査実施に適しているからである。

本研究は既に昭和42年に、豊川が食品や料理に対するイメージについて長野県佐久市、長崎県南高来郡南串山村（現同郡南串山町）を含む4地区の中学校を対象に調査している（豊川1973a, 1974

a, 1974b）。そして今回昭和63年から平成元年にかけて同じ中学校を含んだ全国23都道府県の64校を対象にして同様の調査を実施した。本報告では2度にわたって調査対象となった佐久市立中込中学校と長崎県南串山町立南串中学校だけを対象として検討する。

長野県佐久市は、四方を長野県小諸市、北佐久郡軽井沢町、佐久郡田代町、および群馬県と接している長野県東信地区の農村都市である。市内を千曲川が流れ、JR 小海線によって小諸、小淵沢（山梨県）とつながっており、また「佐久鯉」の産地としても有名である。

同市の人口推移は、昭和40年国勢調査での55,149（男26,162、女28,987）から昭和63年の61,061（男29,771、女31,290：推計人口）への増加傾向が見られる。卸・小売業が主な産業であり、従業者構成比は25.9%である。

中込中学校は佐久市中心部で市の官公庁が集中している中込地区を学区とする、同地区で唯一の市立中学校である。

一方、長崎県南高来郡南串山町は島原半島の西岸にあって、千々石湾に面し、加津佐町と小浜町に挟まれた半農半漁の町である。なお同町は昭和44年に村制から町制に変わった。人口は昭和40年の6,511（男3,217、女3,294：国勢調査）から昭和59年の5,772（男2,897、女2,875）への減少傾向にある。

南串中学校は同町唯一の公立中学校である。

表1に対象とした2つの中学校の調査年次別の学年別・性別生徒数を示した。

2. 調査方法

1) 実施方法

表1 対象校・年次・学年・男女別 生徒数

		1 年生			2 年生			3 年生			合 計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
中込中学校 (長野県佐久市)	昭和42年	139	121	260	125	122	247	136	154	290	400	397	797
	昭和63年	91	100	191	107	108	215	100	104	204	298	312	610
南串中学校 (長崎県南串山町)	昭和42年	88	72	160	92	77	169	92	85	177	272	234	506
	昭和63年	44	38	82	40	42	82	48	40	88	132	120	252

表2 実施要領

担当教職員各位

この度は、我々の調査に御協力下さりどうもありがとうございました。調査に際し以下の点に御注意下さい。

1. 調査票は無記名にさせて下さい。
結果は統計的に処理しますので、個人の結果が公表されることはありません。
2. 質問の中には多少難解な点があるかもしれませんが、生徒に対して言葉の説明等は、なさらないで下さい。
3. 所要時間は、説明を含めて20分程度を予定しておりますが進み具合で調整して下さい。
4. 全ての地域での結果がまとまり次第、貴校に対し結果をお送り致しますが、個人単位の結果はお返し出来ませんので、その点御承知お下さい。

生徒への注意（実施前に生徒に対し読み上げて下さい）

1. 筆記具は、黒の鉛筆以外は用いないこと
もし書き誤った場合には消しゴムで消して書き直すこと
2. 全ての食品の全ての項目に回答し、空白の箇所がないようにすること
余り深く考えずに、気楽に答える様にすること
3. 隣り・近所の人と相談しないこと
4. 質問の内容について分からないことがあっても各自で判断し、友人に聞いたりはいしないこと

以上宜しくお願い致します
東邦大学医学部公衆衛生学室

調査は各中学校の教職員の協力のもとに中学校単位で実施し、それは各対象校に質問用紙と実施要項を送付し、教室内での一斉回答（回答時間約20分）の形で行われた。表2に示した実施要項では担当教諭に対して、できるだけ生徒自身の意識のみの回答を引き出すため、質問項目の文言に関する説明を禁止した。

焼 魚

	非	か	や	ど	や	か	非
	常	な	り	い	な	り	常
	に	り	や	い	や	り	に
古めかしい		○					
高いもの					○		
日常的			○				
好き		○					
営業的						○	
簡単な			○				
日本風な	○						

図1 調査表

質問票の一部を図1に示したが、他の食べ物についても同様の形式によって質問している。

2) 対象とした食べ物

対象とした食べ物は、昭和63年の調査では18種類取り上げたが、本研究においては昭和42年の調査結果のうち2校のデータが残っているサラダ、パン、天ぷら、焼き魚の4種類について比較検討を加えた。

3) 食べ物の意識・印象の内容

食べ物に対する意識は、対概念の形で質問し、7段階評定尺度法（Rating method；非常に、かなり、やや、どちらとも言えない、やや、かなり、非常に）を用いて回答を求めた（図1参照）。質問した対概念は、昭和63年の調査では10項目であったが、本報告では昭和42年の調査と合致している「古めかしい—近代的」、「高いもの—安いもの」、「日常的—行事的」、「好き—嫌い」、「営業的—家庭的」、「簡単な—めんどろな」、「日本風—外国風」

表3 食べ物に対するイメージの回答パターン

(左：中込中，右：南串中)

		古めかしい —近代的	高いもの —安いもの	日常的 —行事的	好き —嫌い	営業的 —家庭的	簡単な— めんどろな	日本風 —外国風
パン	昭和42年	J J	M M	A J	J J	J	J J	J J
	昭和63年	A A	J J	J J	J J	A A	J W	J J
サラダ	昭和42年	J J	M A	J J	J J	J J	M M	J J
	昭和63年	A A	A A	J J	J J	J J	J J	A
天ぷら	昭和42年	A A	A A	J J	J J	J	M M	J J
	昭和63年	A A	A A	A J	A J	J J	A A	J J
焼き魚	昭和42年	A A	A M	J J	J J	J J	M M	J
	昭和63年	A A	A A	J J	J	J J	A A	J J

図2 回答パターン

の7項目について検討した。

3. 結果の分析

著者ら(西川1989)は昭和63年から平成元年にかけて行った食べ物に対する意識の対概念の調査結果を、横軸に意識のスケール、縦軸に各スケールの回答率で示し、得られたグラフの形を回答パターンとして捉えて比較検討を行っているが、このとき代表的な回答パターンとしてA・J・M・Wの4つの型を得た(図2)。本報告ではこの4型のモデル・パターンを設定し、各対概念の回答パターンをSchulgen(1989)の方法によって求めたモデル・パターンとの類似性を用いて4型に分類した。

モデル・パターンの設定条件は以下の通りである。

A型：「どちらとも言えない」または「やや」にピークを持つ一峰性のパターン

J型：「非常に」または「かなり」にピークを持つ一峰性のパターンであって、Jの字の裏返し(し)もこの分類に含む

M型：二峰性のパターンであり、かつ「どちらとも言えない」が谷になるパターン

W型：「どちらとも言えない」に山があり、かつそれを挟んで2つの谷を持つパターン

また複数の山を持つ対概念の回答パターンについては、4型に分類するにあたってそれぞれのピークの位置とその高さについても考慮を加えた。

III 結 果

1. 意識の回答パターン

調査結果の4種の回答パターン・モデルとの類似性に基づいた分類結果を表3に示した。当然のことながら、実際の対概念の回答パターンには4種のモデル回答パターンには分類しえないものも存在していたが、その対概念は「好き—嫌い」(中込中—昭和63年調査—焼き魚)、「営業的—家庭的」(中込中—昭和42年調査—パン，南串中—昭和42年調査—天ぷら)「日本風—外国風」(中込中—昭和63年調査—サラダ，中込中—昭和42年調査—焼き魚)であった。

またA型に分類された回答パターンにおいて、ピーク点から外側に向かっての減少に左右で違いが見られるものが多く見られた。

2. 中学校ごとに見られる意識の経年的変化

1) 中込中学校での意識の経年的変化(図3)

調査に用いた4種の食べ物で、昭和42年調査結果では対概念の双方にまたがって二峰性を示すパターン(M型)がみられたが昭和63年調査では見られなくなっていた。またM型を示した対概念は昭和63年においては一峰性のパターン(J,あるいはA型)に変化していた。

(1) パンとサラダ

パンは、昭和42年調査結果と比較して63年調査で一峰性(J, A型)を示す意識が増えたが、「好き嫌い」、「簡単な一めんどうな」、「日本風一外国風」では変化は小さかった。またサラダに対する意識は、「日常的一行事的」、「好き嫌い」、「営業の一家庭的」において変化が小さく、これらの回答パターンは2回の調査ともJ型に分類された。

サラダの「日本風一外国風」についての回答パターンは昭和42年にはJ型に分類されていたが、昭和63年では「どちらとも言えない」の回答率が増加し、「かなり外国風」での二峰性のパターンに変化していた。

昭和42年でのパンとサラダの「古めかしい一近代的」の回答パターンにはJ型からA型への変化が見られた。

(2) 天ぷら

天ぷらに対する意識は、前回の調査よりA型を示す対概念が増え、「かなり」から「やや」あるいは「どちらとも言えない」への変化として表れた。「日常的一行事的」、「好き嫌い」においてはJ型からA型への変化がみられた。

(3) 焼き魚

この中学校の昭和42年と63年の調査結果を比較すると、大きく意識に違いが見られた食べ物は焼き魚であった。特に「高いもの一安いもの」の対概念では、図3に示したように昭和42年、昭和63年の回答パターンが「どちらとも言えない」を挟んで互に対称的な型を示した。

(4) 意識の対概念

「古めかしい一近代的」の回答は、昭和42年の調査ではパン、サラダでJ型、天ぷら、焼き魚でA型であったが、昭和63年調査では4つの食べ物

ともA型に分類される回答パターンを示した(表3)。またこの対概念における変化は、4つの食べ物とも「近代的」から「古めかしい」への方向であった(図3)。

また「好き嫌い」の昭和42年調査での回答は4つの食べ物ともJ型であったが、昭和63年においてはパン、サラダはJ型であるが、天ぷらはA型、焼き魚は分類はできないが「やや好き」と「どちらとも言えない」に山を持つパターンに変化していた。

2) 南串中学校での意識の経年的変化(図4)

南串中学校において、今回調査項目となったどの食べ物についても昭和63年調査では昭和42年調査と比較して対概念の回答はパターンはJ, A型に集中した。

昭和42年調査においてM型の回答パターンを示した各食べ物のそれぞれの対概念(パンの「高いもの一安いもの」およびサラダ、天ぷら、焼き魚の「簡単な一めんどうな」)は、昭和63年調査においてはパン、サラダではJ型に、天ぷら、焼き魚ではA型を示した。

また昭和63年の調査でW型に分類される回答パターン(パターの「簡単な一めんどうな」)が見られた。

(1) パンとサラダ

パンに対する意識は、「日常的一行事的」、「好き嫌い」、「日本風一外国風」においてその回答パターンは同じ型(J型)に分類された。昭和42年の調査で見られたM型を持つ対概念は昭和63年の調査ではなく、また昭和63年ではA型とW型に分類される回答パターンが出現した。

サラダに対する意識は、「日常的一行事的」、「好き嫌い」、「営業の一家庭的」ではJ型、「高いもの一安いもの」ではA型に2回の調査とも分類される回答パターンであったが、はじめの3対概念では回答がやや曖昧になっていた。また「高いもの一安いもの」では「どちらとも言えない」を挟んで対称の変化であった。

(2) 天ぷら

天ぷらに対する意識は昭和42年調査時と昭和63

図3 中込中学校のイメージの変化の経年的変化

図4 南串中学校のイメージの変化の経年的変化

図5 昭和42年次調査でのイメージの変化の経年的変化

図6 昭和63年次調査でのイメージの変化の経年的変化

年調査時ではほとんど変化がなく、「簡単な一めんどうな」の対概念でのみ回答パタンの変化(M型からA型)が見られた。

「営業的一家庭的」の回答パタンは昭和42年の調査では「営業的」から「家庭的」に向かって大小を繰り返しながら回答率が漸次高くなる形を示したが、昭和63年の調査では「どちらとも言えない」に小さいピークを持つもののJ型に分類できるパタンとなった。

(3) 焼き魚

南串中学校での焼き魚に対する意識に大きな変化は見られず、はっきりとした変化として認められたのは「簡単な一めんどうな」のみ(M型からA型)であった。

(4) 意識の対概念

4種の食べ物を通じて経年的変化が見られなかった意識は「日常的・一行的」、「好き・嫌い」であった。この対概念の回答パタンはどの食べ物についてもJ型に分類される回答パタンであった。

「簡単な一めんどうな」という対概念では4種の食べ物全てにおいて経年的変化が見られたが、その変化は食べ物によって異なり、パンではJ型からW型、サラダではM型からJ型、天ぷら、焼き魚ではM型からA型にそれぞれ変化した。

「古めかしい・近代的」の回答パタンは、昭和42年の調査ではパン、サラダでJ型、天ぷら、焼き魚でA型であったのが、昭和63年の調査では4つの食べ物ともA型に分類される回答パタンに変化した。

3. 意識の学校間格差

1) 昭和42年調査時における中込、南串両中学校の意識の違い(図5)

4種類の食べ物に対する意識はどちらの学校においてもJ型に分類されるような回答を示すパタンが多かった。また対概念の両側に山のある二峰性の回答パタン(M型)を示す対概念が認められたが、そのとき2校の回答パタンは一致しているか、あるいはA型に分類されるパタンであった。

「高いもの・一安いもの」あるいは「営業的一

家庭的」の対概念で回答パタンに違いが認められる食べ物があった(表3)。

(1) パンとサラダ

パンに対する意識では「営業的一家庭的」の対概念で違いがみられ、南串中ではゆるやかな一峰性の回答パタン(J型)なのに対し、中込中では「かなり営業的」と「どちらとも言えない」の2点が同じ回答率である二峰性の回答パタンを示した。

サラダに対する意識のうち、回答パタンに大きな違いが認められたのは「高いもの・一安いもの」のみであった。また同じ回答パタンに分類できた対概念のうち、他の対概念はJ型であったのに対して「簡単な一めんどうな」の回答パタンはM型に分類されるパタンであった。

(2) 天ぷら

天ぷらに対する回答パタンには2校に大きな違いは見られなかった。しかし、中込中学校の生徒のほうが南串中学校生徒よりも「日常的」、「家庭的」な食べ物であると意識し、「好き」と回答した割合も低い。

(3) 焼き魚

焼き魚では昭和42年の調査において中込、南串両中学校の回答パタンで大きく異なった意識が存在した。中込中学校の生徒は、比較的「高く」、あまり「古めかしいとは言えない」、どちらかというところ「日本風」の食べ物と考えており、また南串中学校生徒は比較的「魚」が身近な存在で、「安く」て、「やや古めかしい」、「かなり日本風」の食べ物と考えていた。

2) 昭和63年調査時における中込、南串両中学校の意識の違い(図6)

昭和63年の調査においては、食べ物に対する意識に学校間の格差はほとんど見られなかった。特にパン、サラダについての両校の意識は一致し、この2種の食べ物には地域的な差がないことがわかった。

4. 中込、南串両中学校での意識の経年的変化の違い

学校差を含む経年的変化のおおまかな流れとして、昭和63年の調査では学校間格差が見られなく

なったことが認められた。

1—3の結果に基づいて、2校の中学生の意識を、学校差を含んだ経年的変化によって分類した(図7、表4、5)。表4に示したように理論上有り得ないものも加えて組合せとしては8種類の類型が考えられるが、今回の調査では3種類のみが

得られた。

I類は2回の調査のどちらにおいても中学校間での差がなく、経年的変化も見られなかった対概念である。

II類は、I類と同様に2回の調査とも学校間格差が認められなかったものの、経年的変化が見られた対概念である。II類における経年的変化には、a) 昭和42年調査時と昭和63年調査時の回答パターンは同じであるがその傾向が多少の変化を見せただけのものと、b) 2回の調査での回答パターンが全く変わってしまったものの2種類が見られた。a)は「古めかしい—近代的」、「高いもの—安いもの」、「日常的—行事的」、b)は「簡単な—めんどうな」に見られた。しかしパンの「高いもの—安いもの」に見られた。

表4 経年変化—学校間隔差による回答パターンの類型

			I	II	III	理論上はあり得る が実際にはない パターン	理論上あり 得ない パターン		
学校差	42年	—	—	+	+	—	+	—	+
	63年	—	—	—	+	+	+	+	—
経年変化		—	+	+	—	+	+	—	—

図7 学校差・経年的変化によるパターン

表5 学校差からみた経年変化パターンによる分類

		I 類	II類	III類
学校差	昭和42年	—	—	+
	昭和63年	—	—	—
経年変化		—	+	+
(食 品)		(a)	(b)	
パン	好き—嫌い 日本風—外国風	古めかしい—近代的 日常的—行事的	高いもの—安いもの 簡単な—めんどうな	営業的一家庭的
サラダ	好き—嫌い 日本風—外国風	古めかしい—近代的 日常的—行事的 営業的一家庭的	簡単な—めんどうな	高いもの—安いもの
天ぷら	好き—嫌い 日本風—外国風	古めかしい—近代的 高いもの—安いもの 日常的—行事的	簡単な—めんどうな	営業的一家庭的
焼き魚	好き—嫌い	日常的—行事的 営業的一家庭的	簡単な—めんどうな	古めかしい—近代的 高いもの—安いもの 日本風—外国風

IIa)類：回答パターンの変化はない。 IIb)類：回答パターンの変化あり。

いもの」は他の食べ物と異なり b) に含まれていた(表5)。

Ⅲ類に分類される変化は、昭和42年調査に見られた学校間格差が、経年的変化に伴って昭和63年調査では認められなくなったものである。この型はⅡ-1b) 類に地域格差の変化が加わったものとも解釈できる。

焼き魚はⅢ類に分類された対概念に他の3種の食べ物とは異なったものが見られた。すなわち、他の食べ物ではⅠ類に含まれる「日本風-外国風」とⅡ類に含まれた「古めかしい-近代的」の2つの対概念がⅢ類に分類された。

またこの型には「営業的-家庭的」、「高いもの-安いもの」の対概念が分類された。

Ⅲ類の特徴として、昭和63年で見られる回答ボタンが昭和42年の2校の回答ボタンのいずれとも異なっていることが挙げられた。

Ⅳ 考 察

「食べ物」に対する意識の変化には多くの社会的因子が関わっていると考えられるが、意識はそのまま嗜好に続くものとして食事・栄養指導を考える際の必要不可欠なものと思われる。また、今回の一連の調査には中学生を調査対象としたが、これは中学生が食生活・食習慣の形成期に当たると考えたためである。対象の「中学生」での食生活・食習慣はまた、以後の食生活に大きく影響を与えるばかりでなく、成人病のいくつかの因子に影響するとも考えられており、その点においても彼らの嗜好を調査する意味は大きい、と考えられる。

1. 回答ボタンからみた変化

著者らが分類した食べ物に対する意識の対概念の回答ボタンは、以下のように意味付けされる(図2)。

A型は、「どちらとも言えない」とする回答率が最も高い山型をなすボタンであり、生徒の持つ食べ物に対する該当の対概念が曖昧である場合に出現する、と考えられる。

またJ型はA型とは異なり、回答、即ち生徒の

持つ意識が対概念の片側に偏っている回答ボタンである。これは生徒がその食べ物に対して圧倒的な多数派となる共通した意識を持っていると解釈できるボタンである。

M・W型は双方ともその対概念においてコンセンサスが形成されておらず、しかもW型においては「どちらとも言えない」とする生徒と極端に相反する意識を持つ生徒がいることになる。また二分極しているが、その対立する意識はW型に比べて緩慢であることがM型の特徴と考えられる。

以上の意味付けに基づいて、2回の調査での各中学校の回答ボタン(表3)を見るならば、どちらの中学校においても昭和42年の調査ではM型が見られたが、昭和63年ではJ、あるいはA型に変化しており、かつ昭和63年には新たにM型に変化したものは認められない。

M型は比較的不安定な意識であるということもできる。即ち、一つの型からJ型、またはA型への移行途中の状態とも考えられる。従って昭和42年では食べ物に対する意識がそれ以前の状態から新しい状態へ移る段階にあったのが、昭和63年では一つの安定した状態に落ち着いたとも考えられる。このような、M型からJ、A型への変化は「簡単な一めんどろな」という対概念について、4つの食べ物に共通して起きている。このようになるためには中学生が調理することの手間に対して、共通の見解を持つようになったという変化があったと推察される。

W型は表3にあるように、M型とは逆に昭和42年には見られなかったが昭和63年になって出現した。W型は食べ物に対する意識がM型よりもさらに複数あるが、この場合「どちらとも言えない」という回答があると言うことは、M型と同様に不安定な型であることを示している。しかしこれは、中学生の生活環境や本人の体験が複雑な意識を作り出す証拠である。さらにW型を示した対概念は両校ともパンの「簡単な一めんどろな」である。一般論として、食べ物と対概念に由来する要因一例えば、身近な複数の種類の食べ物と豊

富な知識や体験の存在一によって影響を受けると考えられるがパンの場合は身近な食品であるだけに、多様な意識を生徒に与えたと考えられる。また、質問の内容や仕方が不適切であったために回答が分極したとも考えられる。しかし、池上(1978)によれば、パンは学校給食におけるパン食などの人為的な施策も関与して現在ではその簡便性のために主食として普及、定着したが、あくまでもその立場は米の代用品であり従来からの「嗜好品」の立場は未だ存在していると述べている。この二種の立場がパンにおけるW型の出現を促したとも考えられる。また池上はパンの普及にともなってサラダをはじめとするいわゆる洋風料理も普及したとしているが、今回の一連の調査において、サラダにはパンで見られたような変化、あるいは違いが認められていない。この差はパンは食事用(主食と副食)と間食用の役割を持つが、サラダにはそのような複数の用途がないという違いによって生じたとも考えられる。

昭和42年ではパンと焼き魚については中込中学校と南串中学校での回答パターン格差があるが、昭和63年では学校間の回答パターン格差はなかった(表3)。このような回答パターン格差の消失は両地域間格差がなくなったことを示すと考えられる。

焼き魚については、豊川(1973a, 1974b)は調査対象となっているこれらの地域が「魚」に対して特徴を持つ、即ち中込中学校の生徒の学区である地域では「魚」は川魚、あるいは特産商品としての「佐久鯉」であり、また南串町は半農半漁の地区である、ということが昭和42年では両校生徒の食べ物のイメージの形成に大きく関与していたと述べている。しかしながら昭和63年の調査ではこのような学校間隔差が消失している。同時に、地域の特徴をも消失させるようななんらかの外的因子が存在し、これが関与したとも考えられる。実証できないが、流通機構が拡充して食品入手の格差がなくなり、テレビ、新聞等のマスメディアの発達により、情報の共有が進み、画一化が進んだことなどがその理由と考えられる。

Birch(1980)によれば、小児の嗜好の形成にあ

たっては、その集団の何を食べるかを決定する人間(あるいは食生活のプログラム)の嗜好が大きく影響するとしている。この一連の調査は同一の中学校で約20年の間隔を置いて行われており、これは親と子の世代間の格差とも考えられる。垣本(1988)は、母親の嗜好がその子供の嗜好に大きく影響していることを示しており、そのことは経年的変化の生じない可能性を含んでいる。しかしながら今回の調査に見られた経年的変化は、家庭要因以外の要因が食べ物に対する意識の形成に強く関与していることを示唆していることになる。中学生の食生活に影響しているものとして、学校給食の存在も認められるだろう。学校給食はパン食の普及を促したが、さらに文部省体育局学校給食課の調査結果(1978)によれば米飯給食の普及が特に魚・肉・卵類の副食の増加を促しており、これがパン、焼き魚での学校間格差の消失の一助をなしていると考えられた。

2. 経年一学校間格差パターンの変化

今回学校間格差を含んだ経年時変化を三つに分類したが、それぞれ以下のように捉えられる(表5)。

I類はそれに分類された対概念がどの食べ物においても意識がはっきりとした、つまりJ型を示す対概念が含まれている。このことから、食べ物に対する意識のうち生徒がはっきりとしたものを持ち得る対概念は経年的な影響を受けにくい、と言える。

II類は、I類と同様に2回の調査とも学校間格差が認められなかったものの、経年的変化が見られた。つまりこの類に分類される対概念は地域的な差がなく経年的な変化が大きいと考えられる。経年的変化には様々なものがあると考えられ、その結果として今回の調査においては傾向が強くなるa)類と回答パターンが全く異なったb)類が得られた。a)類に分類された対概念は普段の食生活からの知識が、またb)類の対概念は実際の経験が、回答により多く影響を与えるとそれぞれの類型に含まれる対概念の性格から考えられるが、それが経年的変化の出現に違いを生じさせたと言える。

しかしながら、a)類に分類される「高いもの一安いもの」のうち、パンはb)類の変化を示した。さらにこの対概念の昭和63年での回答ボタンはW型であり、この面からもパンの「高いもの一安いもの」に関与する因子になんらかの変化があった、あるいはパンと回答者との食生活における関わりが他の食べ物とこの点で異なったと考えられる。

III類に分類される変化は、II-b)類に地域格差の変化が加わったものとも解釈でき、これは昭和42年で学校間格差が認められたものにはっきりと見られる。

III類には「営業的一家庭的」、「高いもの一安いもの」の対概念が属する。これらの対概念には対象者の環境からの知識によるものであり、かつ流通機構などの広範囲の社会的要因が大きく関わっているが、そのことが中学生の意識にはっきり現れている。

焼き魚はIII類に分類された対概念に他の3種の食べ物とは異なったものが見られた。すなわち、他の食べ物ではI類に含まれる「日本風一外国風」とII類に含まれた「古めかしい一近代的」の2つの対概念がIII類に分類された。これは先に述べたように対象とした2つの中学校が「魚」に対して特徴を持つ地域にあることが関わっていると考えられる。

III類の特徴として、昭和63年で見られる回答ボタンが昭和42年の2校の回答ボタンのいずれとも異なっていることが挙げられる。このことはIII類に分類される対概念は2回の調査の間に何らかの影響によって新しく作られた、とも受け取ることができ、対概念の性格と照らし合わせて興味深い。

社会的な変化に伴う「食」における変化はさまざまな方法で調査・研究されているが、その変化が「食べ物」に対する意識においても認められたことは、その定着にある程度の時間が必要であることも考慮すると、この変化が短期間のいわゆる「流行」のものではないと考えられる。このことは今後の食事・栄養指導の上で考慮すべきことと思われる。

V ま と め

「食べ物」に対する意識について長野県佐久市と長崎県南高来郡南串山町の2地域の中学生を対象に学校単位でアンケート調査を実施し、2中学校の学校間格差、経年的変化について比較検討を行った。

その結果、両学校において経年的変化が認められ、その変化は2中学校間の格差が消失する、という形で現われた。特にこの変化は、両中学校がある地域のそれぞれの特徴に関連する焼き魚に顕著であった。

また今回報告した2回の調査は同じ中学校の中学生を対象にしており、調査の間隔から親と子の世代間における違いとしても比較検討できるが、「日常的一行事行」、「好き一嫌い」という対概念で変化が認められなかった点で、親の食嗜好が子の食生活に現れ、それが子の食嗜好に影響していることの一端を示していることが見られた。また、それ以外にも学校給食や広告、流通などによる経験、知識が多くなっており、その存在とその変化の一端を示す結果が得られた。

なお、本研究は財団法人すかいらくフードサイエンス研究所昭和63年度研究調査助成金によって実施したものである。

文 献

- Birch, L.L. (1988): Effects of peer models' food choices and eating behaviors on preschools' food preferences, *Child. Development*, 51, 489—496
- 池上和男 (1978): 広告と消費構造—食生活を中心として—。(財)吉田秀雄記念事業財団, 昭和53年第12次助成研究報告
- 垣本 充 (1988): 現代っ子の食生活を知ろう, *歯科衛生士*, 12(6), 38—40
- 文部省体育局学校給食課編 (1978): 学校給食必携, 283—289
- 西川浩昭, 他 (1989): 未発表
- Schulgen, G. (1989): A measure of similarity for response curves based on ranks, *Statistics Med.*, 8, 1401—1411
- 豊川裕之 (1973a): 食と健康, 保健の科学, 15(8), 513—522

豊川裕之（1973b）： 栄養指導のための調査統計学入門〈13〉嗜好調査（1），臨床栄養，43(6)，699—704

豊川裕之（1974a）： 栄養指導のための調査統計学入門〈14〉嗜好調査（2），臨床栄養，44(1)，51—56

豊川裕之（1974b）： 栄養指導のための調査統計学入門〈15〉嗜好調査（3），臨床栄養，44(2)，173—180

豊川裕之（1974c）： 栄養指導のための調査調査統計学入門〈16〉因子分析，臨床栄養，44(3)，265—270

豊川裕之（1989）： 食生活の変化と栄養教育の課題，学校保健研究，31(12)，552—557

（受稿 1990. 6. 13）